

『甲陽軍鑑』の方言

酒井憲二

一

『甲陽軍鑑』の勝頼記上の第九節に、次のような一条が見える、

各々、大小・上下共に、武田勢イ申スハ、「御代がわりに、とぶ鳥もおつるほどの勝頼公御いせいなり」といさみて、足輕・かせもの・こもの、うたをつくりてうたひ申候。其うたは、

信長ハいまみあてらやいひばさま、城をあけちとつげのくしはら

とうたい候事ハ、甲州・信濃のげれつのことばにて、あさなる事をバ、「あてらき事かな」と申候故、しかも、いまみ・あてらとゆふ城おちたる故なり（十九、30オ―30ウ）

天正二年二月中旬から四月上旬にかけて、信玄なき跡の武田軍を率いた新将勝頼が、五ヶ国の人数を催して織田信長の居国美濃を攻め、連戦連勝、次々と信長軍の砦や出城を落とす。ないぎ（苗木）・かうの（神籠）・ぶせつ（武節）・いまみ（今見）・あてら（明照）・まごめ（馬籠）・大井・中津川・つるひ（鶴居）・かうだ（幸田）・せとざき（瀬戸崎）・ふつた（振田）・くしはら（串原）・あけち（明智）・いひばさま（飯羽間）など、都合十八城を連破するのであるが、右の一条

は、その後、勝利に浮かれた雑兵どもが、落城を読み込んだ歌を作つて歌つたことを述べた場面である。歌の文意は必ずしも分明ではないが、いまみ・あてら・いひばさま・あけち・くしはらの五城が読み取れる。問題はそれに続けて、

甲州・信濃のげれつのことばにて、あさなる事をば、「あてらき事かな」と申候故

と説く箇所にある。甲州（山梨県）と信濃（長野県）、いわゆる甲信地方を一まとまりとして把握し、「げれつ（下劣）のことば」という限定ではあるが、同一言語圏の存在を前提とした表現だからである。

軍鑑において「げれつ」という場合は、雑兵や農民など一般庶民を指す。例えば次のごとくである。

りこんのすぎたる大将ハ、げれつの縦へに「さいたらばたけ」と申ごとく（四26オ）

「ゆきがけのだちん」とやらん、げれつの申ハ是なり（九41ウ）

げれつのたとへに「盗人ニおいをうつ」と申ス儀ならん（十四7ウ）

げれつの作り歌に…（十五59ウ）

げれつのたといに「ねこにかつうほのふしをあづけたる」と申スも、大かた此度弾正分別のやうなる事にて候（十

九36オ）

従つて、「甲州・信濃のげれつのことば」とは、いわば「甲信地方の庶民の言葉」すなわち「甲信地方の方言」というに等しく、甲信方言がこの『甲陽軍鑑』の著者（語り手ないし書き手²）に意識されていたことを物語るものといえよう。当時、甲信方言では、「あさなる事」を「あてらき事」と言つたというのである。心のはたらきの浅い、あさはかなことを言う言葉であろうが、この語、軍鑑以外の文献には未見である。

ちなみに、版本（片仮名付訓十行本³）や大全（甲陽軍大全⁴）は「甲州・信濃の下劣の詞に、てあさなる事をば、あてらき事かなと申候故」のごとく「てあさなる事」とするが、「てあさし」は、日本国語大辞典⁵によれば、1、力が弱い。力があまりはいらない。（読本の例を挙げる）2、てぜまである。狭い。（雑俳の例を挙げる）等の意となる語であつて、こは写本のごとく、「あさし」に基づく「あさなる」と見るべきものと思われる。

ともあれ、『甲陽軍鑑』中において、甲信地方の方言（らしき語）に触れているのは右の箇所のみである。「甲州・信

濃のげれつのことば」と言う以上、自らの言語は、都の普通のことば、中央のことばとして全国に通じるいわば共通語、との認識があつてのことであろう。

この書物、かなづかひ、よろづ、おせんさくにて、ものしりの御覧候ハヽ、ひとつとしてよき事なくて、わらいごとになり申べく候（一2オ）

と書き始める『甲陽軍鑑』ではあるが、また、

物しらぬ人も、かなをバよむものにて候間、雨中のつれぐにも、むがくのらふにやく、とりてよみ給ふやうに（一3ウ）

初めから平仮名の本として成つた『甲陽軍鑑』であるが、用語も努めて都のことば、共通語を目指したものと思われる。殊に、能楽師大蔵彦十郎が書き手であつてみれば、この点は尚更であろう。『甲陽軍鑑』は当時の共通語で書かれた本なのである。

二

しかしながら、『甲陽軍鑑』のみにしか見られず、通行の国語辞典にも見出し語として掲げない語などの中には、当時の方言と見なければならぬものも自ずから存するであろうと思われる。また、写本にのみ存して版本で他の語に言い替えられたもの、あるいは、現在も方言として伝わるものの中にも、当時から方言として行われていた語があるかも知れない。今、それらの語について、用例を挙げて考えてみることにする。

1、謙信、あざゝゑわらうて被仰（十一37ウ1、版本十下25オ4あざさへわらふて）

内藤、あざゝへわらふていわく（十五54オ8、版本十四34オ2あざゝへ笑て^{ワラッ}）

日本国語大辞典や時代別に見出しなし。他の文献に未見。「あざ笑う」の方言形か。

2、さすがの落合彦介が、七拾にあまる老母を、あらばうこばうしが手に渡し、ろうのうちにて、せつしころされたる

は、みやうだいのほぢにてはなきか（十七65ウ、版本46オ2ほうこぼつし）

荒坊子法師か。未詳。日本国語大辞典は「ほうこ」に「夜など子どもをおどかす時に言うことば。おばけ」として、長野県諏訪方言を挙げる。日本方言大辞典⁽⁸⁾は「ぼーこん（亡魂）」の異形として、長野・新潟等の「ぼーこ」（幽霊）を挙げる。

3、されば我等、四方の国をおしかすめ、いだてへひがし道五六十里づ、とりつめざるはなし（二45オ、版本36ウ5堅^{クテ}）居館。ほかに五14ウ・九47ウ・二十一11ウ・80ウ・108ウに「いだて」、十六63オに「いだち」、九123ウ・158ウ・十96ウに「居館」。日本国語大辞典は、広本節用集や日ポ辞書により「居城^{いじょう}」は載せるが「居館」は不載。「居城」は軍鑑本篇に50例、末書に21例見える。

4、ほうかう和尚仰せらる、「今福入道、此いりりへすみをいれてたまわり候へ」とありければ（十五19ウ、版本十四12ウ9いりり）

版本は「いりり」とするが、十二9ウは写本が「長いりり」、版本は「長いりり」とする（十一上11オ1）。両形、揺れていたであろう。「いりり」は古辞書類や太平記・かたこと等にも見える。また各地の方言に行われている（日本国語大辞典・日本方言大辞典）。

5、諸葛百姓なれ共、大将の、是をか、へなされたため、如何にもいんぎんなる出達にて、諸葛がやどへ、大将ぢしん御座候へども、二度ハ留守とおしかへし、三度めに彼諸葛、畠をうなふて居る所へ、大将ゆきあたり、何ほどもいんぎんにし給ふ故、こゝにてハ諸葛くわをなげすて、今の大将を守護して、軍法を仕り、いくさに其大将かち給ふ（十五78オ、版本十四49オ3うなふて）

「うなう」は田畑を耕してうねを作る意。また、一般に耕すことをいう語として中部・関東・東北の各地の方言に用いられている（日本国語大辞典・日本方言大辞典）。文献例は丹後守為忠百首等にあり。実隆公記に「田舎に田のうねをつくる事をうなうと云ふ事あり。」（長享二年三月二十八日）とあるのを見れば、既に方言として意識されていたかと思われる。『甲斐方言集成（稿）⁽⁹⁾』によれば、「うな」（山梨鑑）「うなう」（甲斐方言稿本）「あわうない・そばうない・きびう

ない」(甲州方言)「うのう」(山梨県勢総覧)「うのー」(中巨摩郡誌・奈良田の方言)などの形で諸書に採集されている。

6、かたな・脇差・大小も其身のこのみぐ、馬も大だけ・小だけともに、具足もあつう・うすう、長刀も大小ともに、そりたるもすぐなるも、ほそきも広きも(七七オ、版本4ウ8大小)

日本国語大辞典に不載。たけの高いものと低いもの。日本方言大辞典は「おーだけ」に「かさだかなさま」として石川県鳳至郡を挙げる。

7、武士衆におほへの者、かいがしきもの、はしりめぐり一かど仕るべきりかう者、三人寄合、武者ぞうたんいたす所にて(十四29ウ、版本十三17ウ6かひく^{シキ}敷)

叔又、右の場にて、鎧をあわする人につぎ、鎧下の高名をいたし、此兩人につぎ、鎧わきをつめて、ほまれある人をバ、一度二度三度までハ、かいがしき人とあふ(十四58オ、版本十三33ウ5かひく^{シキ}敷)

「かひがひしき」の方言形か。他の文献に未見。

8、こ屋おとし・らん取いたし、かつ田を仕り、下^{した}いさむ事かぎりなし(九52ウ、版本39ウ1かつた)

日本国語大辞典不載。ほかに十64オ・十一87ウ・十六28ウ・十九40オに見え、「かつ田はたらき」が2例(十二78オ・78ウ)見える。「かり田」は六36ウほか4例であるから、「かつた」の形の方が軍鑑には多い。田畑の作物を力ずくで刈り取る作戦の一つである。

9、たけ八寸八分にして、そのかんかたち、たとへば、大むかし、頼朝公のいけずき・するすみにも、さのみをとるまじき馬(一54オ、版本43ウ8かんかたち)

「かみかたち(髪貌)」の転。方言形か。

10、ひくるれば、信玄公御くつろげじよへいらせ給ふ(二50オ、版本40オ8奥)

信玄公他界被成、三年此かた、御くつろげじよ迄ねりいるとて、いたわしや三枝勘解由左衛門、此正月十六日に、腹ヲをたて、我等に物語被申候つる(四36ウ、版本24オ8御くつろぎ所)

勝頼公御座所、御くつろげじよのこにはに、馬のくびを二つ迄あらわしてみゆる(二14オ、版本2オ7御くつろ^{ジョ}け所)

くつろぎの場所、即ち、居間や寢室。第二の例は御廟所を指す。日本国語大辞典や時代別に不載。

11、晴信、わかき大将と申、かつにのつて当方々働、はるハさなへをちらし、なつは麦さくをふり、或ハうへ田をこね、あきハけさくをふりに罷出候ハ、のちハ、地下も、侍共にこんきうにおよび候に付てハ（九38オ、版本九上30ウ1毛作をふりに）

たゞし、信濃衆かう敵ニて候間、いまより十年も働給ひ、けさくをふり、うへ田をこね、た、かひに御てなみをみせられ（十62ウ、版本十上41ウ10毛作をふり）

しかも、城主をうち、九月中毛作をふり、十月御帰陣也（十70オ、版本十上48オ3も、作をふり）

西上野の毛作をふり、やきばたらきあそばし候へども（十96ウ、版本66オ8毛作をふり）

西上野の毛作をふりたまひ候へども（十一6オ、版本十下5ウ2毛作をふり）

せめてハ五年六年も其所へ働、毛作をふり、やき働仕らざればかうさんせず候（十二88ウ、版本十一下13オ2毛作をふり）

版本は専ら「モウサク」と付訓するが、仮名書きの第一・第二例のごとく「けさく」である。「けさくをふる」は、田の稲穂を踏み荒らすことと思われるが、日本国語大辞典や時代別に不載。

12、右五人のしらびやうしのこでわきどもに、きくやしや・ききやう・はな・おしまなど、いふ女共を、かなたこなたへひきまわり（五55オ、版本38ウ1こでわき）

手下や召使の者の意で「小手脇」か。日本国語大辞典や時代別に不載。

13、武田晴信の弓矢をとるに、ごどうのかちを肝要にしめらる、ハ、国お、く取るべきとのおくゐなり（九157オ、版本九下56ウ2後途）

我等ハ国とるニハかまはず、ごどうのかちにもかまわず、さしか、りたる一戦をまわさぬをかんやうにいたし候（九157ウ、版本九下56ウ3後途）

身方の御弓矢、ひをおつてつよく、ごどうの御利運ハ、諸人のうたがいあるまじく候（九161オ、版本九下59ウ5後途）

以来ハ、景とら何様に仕とも、晴信公ハ御腹をたてられず、備を能くたて被成、少もけがなきやう二遊、ごどうの御勝利肝要と山本勘介申上る（九166ウ、版本九下64オ2後途^{ゴド}）

をしつめてよくしあん・くふうをもつて、位づめに仕り、心ながくありて、後道^{ゴド}のかちを肝要に可仕（十三66ウ、版本十二38ウ4後途^{ゴド}）

かう有て、けいはくの侍ハ、大将の分別ちがひたまひ、ごどうまけになる事をも、ほむるものなれば、こゝを以、いくさにけいはくをきろふ也（十六77オ、版本十五31オ9後途^{ゴドマケ}負）

版本はすべて「後途^{ゴド}」とし、時代別は「これからのちめぐつてくる機会」と解するが、写本は「ごどう」5例と「後道」とである。「最終的な（かち・利運・勝利・まけ）」を意味するものかと思われる。「ごどう」と「ごど」と揺れていたであろうか。日本国語大辞典には不載。

14、しよせん見ごりのために、かみのきどに、さかさばたもの^{サカハタモノ}にあげよ（十七17オ、版本12オ8逆機物^{サカハタモノ}）
かり坂のきわにてからめ取、諸侍エのためにさかさ機^{サカハタモノ}にあげよ（十七36ウ、版本25ウ7逆機^{サカハタモノ}）
しづめと云処二増城源八郎さかさばた物^{サカハタモノ}にあがる（十七37オ、版本25ウ9逆機^{サカハタモノ}）

罪人のからだを逆さまにして行はりつけであるが、版本の「さかはたもの」に対して写本は「さかさばたもの」である。写本の語形が原形であろう。「さかさはりつけ」や「さかさばつつけ」の見出しはあるが、「さかさばたもの」は日本国語大辞典に不載。

15、其兩人、殊外の才覚仁にて、長坂長閑・跡部大炊介所へ常に立ちいり、客来あればさくまい所にて料理ぜんぶを請取り、両所ヲ大せつがほに致事、たゞ大形ならざるにより、長坂長閑・跡部大炊介兩人の氣にあふて、是ほどの人、よにも有間敷キとほむる（十七70オ、版本49オ5さくまひ所）

台所・調理場を指す語か。「さくまい」は恐らく「さくばい」と同語であつて、「処理・始末・工面・やりくり・準備」等の意で島根・山口・三重等に行われている語（日本方言大辞典）と関連があるであろう。

16、是ハ穴古屋居城也。付リ、地戦ニ八九十騎（八5オ、版本なし）

味方甲州勢、地戦たりと云共、時分がら、信とら公つゐしユつの砌、しかも、大将晴信公十八歳にて、わかくまします（九7オ、版本九上7オ3地戦^{タ、カイ}）

本篇に18例、末書に5例。版本は「地戦^{タ、カイ}」とするが、九141ウのは大全に「地戦^ン」とあり、末書下之上90オ5には「ぢせん」と仮名書きの例が見える。日本国語大辞典は「じだたかい」として掲げ、大友記と軍鑑の例を引くが、「じせん」の見出しにすべきかと思われる。

17、母ハわらべなくをいたわりてきうをせず。それによりて、どうじ、母にはしとづくといへ共、後やまふつのりて、まなこつぶれ、あしく取まわせばしする時、母後にくゆる（五51ウ、版本35ウ5しみつく）

親しんでまとわりつく意かと思われるが、他に未見。版本や大全は「しみつく」に作る。

18、さりながら、御用にたつべき衆は、らうにやくによらず、たいがい儀をバ堪忍いたしても、又ふそくをかきてハ、まかりあらぬものにて候。じめんをかき、かんにん仕る人ハ、御用にもさのみたち申まじく候（七12ウ、版本8ウ6異文）

面目をなくし恥をかかせられることか。版本は「但不足^{フツク}をあたへられても、をめぐと堪忍仕るほどの者ハ」とする。「じめん」は「じきじきの面会、直接の応対」の意の「自面^{メン}」であろう。

以^{メン}自面用所^{ヨウジョ} 不^レ可^ニ裏御門出入^{ウラノカドノイデス}事（二39オ、版本32ウ7）

日本方言大辞典は「じめんかく」を「じゅーめん（洪面）かくか」とし、「赤面させる」意として丹波通辞を載せる。

19、こ、ハ謙信もぢう手を一つ仕り、頓而、川をひきこし、そこにて夜をあかし、日出バ、かかつて合戦をはじめ（十24ウ、版本十下15ウ2ぢう手）

佐藤本や大全は「重手^⑩」とする。重要な手段の意か。日本国語大辞典に不載。

20、彼村井、荒川ハ、ちとけいはく者の様子にて、少も御前の能キ衆へハ、さまざま取り入、うやまいて、とざま衆へハ一段慮外をいたし、五代・十代めしつかわれ、あるひハ、一、二代とても、命をなげうち、すどの御奉公申たる御ふだひ衆をさしこへて、上座へなりあがり、しゆつ者にて、きのふまであがめたる者をも、御前あしくなりたる

と聞てハ、そのまゝ、見ぬよしを仕り、あしもとをまばる侍（十七74オ、版本52オ10しゆつもの）

出しゃばり者の意の語であろうか。日本国語大辞典に不載。

21、かやうのざれ事も、さいか・とうかのぜんしうへたち入、少ぜんしゆうぐちに、づこびて申候也（十一68オ、版本十下46ウ7づこびて）

「づこびる」は、氣どつた様子をする、利口ぶる意。「すこびる」が標準形らしい。日本方言大辞典は「しこばる」の項に、自慢する意の「すこぶる」（石川県珠洲郡）を掲げる。

22、はた色を御覧じて、雲氣・ゑんきを見わけ、すだ・ゑぎ・さごのとびやう、そなへをたて、人数組・ぢんどりのなされやう、皆是ぐちなるやうにおぼしめすべく候間（一76オ、版本59オ4すだ、ゑぎさご）

雲氣・煙氣、其外、ゑぎ・さご・すだ、来りやう・行やう、右のほかも口伝あれ共、勘介流ハちゞめて、これは一段みじかし（二35ウ、版本29ウ5エギ、サゴ、スダ）

軍鳥といわれる三鳥、「すだ」は鳩、「えぎ」は烏、「さご」は鳶の異称という（日本国語大辞典）が、他の文献に未見。日本方言大辞典にも不載。

23、此坊主も、うんでんにて日をいとい、早朝に罷越、衣をぬぎてかきにかけて、せ、なぎのかたはらへたちより、せうべんの用所をたし、井のもとにてうづをつかい、衣をとりてきんとする（十八42ウ、版本31オ10せ、なぎ）

名義抄・字類抄を始めとする古辞書や日ポ辞書にも見え、流しものと下水だめ・どぶ・下水溝などの意で広く各地の方言に用いられている（日本国語大辞典・日本方言大辞典）。軍鑑外篇（版本卷十六）には次の例も見える。

馬の一葉ノ事。：亦云、雉子の雌の足を、取集て、黒焼にして、せ、なぎの水にて、のますべし。いかなる大事の、頓病にもよし（版本十六18オ7）

24、又、当十月病死せられたる氏康もつよき武将なれ共、上杉家のぶ心がけなる大敵をせ、りつけたる人なる故、ゆみ矢をねばくとり、信玄とみませ合戦にも、をそくまいらる、内に、さき衆をきりくづされ（十二102ウ、版本十二下24オ1せ、り付たる）

つつき回す、いじくる意か。日本国語大辞典に不載。

- 25、此ばかり大将のしかたは、たわけても、かならず、心はたひらくこうなるものにて我がまゝなるゆへ（三二オ、版本一オ九太略）

大らくの若者ハ、兵部と名をつく事、必無用也（十六四ウ、版本十五ナシ、大全たいらく）

「たいらく」が2例見えるが、第一例の版本のごとき「大略」の訛語形であろう。「大略」は本篇に27例、末書に7例用いられている。「たいらく」（ほらを吹く。大げさに言う。福井県坂井郡）と関連あるか。

- 26、此儀を信玄公、つまびらかにたゞして聞給ひ、「元康ハ武道・分別、両方達したる童部也。日本国にはやわか手の武士ならん」となのめならず御たくぢやうなり（二一九オ、版本一六ウ七ほめ給ふ）

まして、ようしやうより数年心にかけてうちすましたるかたきなれば、諸人はめたて、たくぢやう致スに付而ハ、ほむる者をもおくふかく人が存ル物也（十七三十一オ、版本二二オ四ナシ。諸人はめたてば、ほむる者も）

「たくじやう」は「擢賞」か。第一例を版本「ほめ給ふ」とすることく、この上なく誉め上げる意の字音語と思われる。日本国語大辞典は「擢賞」に陳書―宣帝紀の例を掲げ、日本側の例は不出。「たくじやう」は、版本で避けなければならぬ程、耳遠い語だったのであろうか。

- 27、大敵にかちたまハゞ、少敵ハ申におよばず、つよてきにかちたまハゞ、よハてきハ申ニおよばず候（九八六オ、版本九下二ウ一〇強敵）

他に2例（十四六〇オ）。日本国語大辞典「よわてき」は載せるが「つよてき」は不載。

- 28、古語二曰「金以火試、人以言試」ときく時は、人のぜんあくを申にて、そのものゝてだけなんぶんの人なりとしるべし（二二四ウ、版本二一オ二行）

其ごとくに敵の手だけ、武刃のくらひをよく見すゑて、我が人数、大将共のうちにて、其働得たる所を見すへ、是に合ル事（十六一三ウ、版本一五一〇ウ一行）

付リ、敵の大將、弓矢を取、其格ノ義也。手だけハ勝利のやうす也（十六一四オ、版本ナシ）

版本のごとき「てだて」の訛であろう。3例も見えることは偉とするに足る。「てだて」は本篇に29例、末書に5例見える。

29、をのく居館ゑこもり、でんどうへ出て、たてをつき申事、いたさず候故、十月中旬に、信玄公、御馬入たまふ（十97オ、版本十上66オ9田頭^{デンドウ}）

城外の意であろうが、日本方言大辞典の「でんどー（青天井の下。青空の下。東京都八王子）」と関連があるうか。

30、武者奉行・はた奉行には、ぶかう・としこばいと、分別・くふうありて、信玄にも一かどのさしひきをいさむるほどの人を、えらびて仕るゆへ（七10ウ、版本7オ8年比）

さすがに武士の心ばせなきものならば、年こばいにあいにあわぬ、とも申さんずるが（十五22ウ、版本十四14ウ6年こばい）

何も年こばいしゆくらふにて（十七5オ、版本4オ4としこばい）

善万坊其時年四拾七八なれば、「尤年こばひよし」とて、其寺をゆずるとある手形をくる、（十八25ウ、版本19オ7トシヨハイ年齢）

4例のうち2例は、版本「年比・年齢^{トシヨハイ}」とする。安定性を欠く語であつたか。「としこばい」は「年勾配」であつて、各地方言の「としばい」「としばえ」と同語であろう。

31、偽りを申かけたるばちに、とじにを仕りたり（五56オ、版本39オ7頓死）

他に未見。「とんじ」の訛であろうか。日ポ辞書^[1]には「トンジ。または、トンシ。不意の死、または、急な死」とあり。32、あのわかき家康申し付る三人の奉行に、三やうのかたぎをゐ、つけたると見えて、「仏かうりき・鬼作左・どちへんなしの天野三兵」と、浜松にてらくしゆにたてたるときく（十五26ウ、版本十四17オ5どちへんなし）

他に未見。公平無私の意か、未詳。

33、おのれが在所くへながにげいたしたるもの、一そなへに二人三人づゝこれあり（五15オ、版本9ウ6長北^{ナガニゲ}）

長く逃げこむこと。日本国語大辞典に不載。

34、忠節・忠かうの侍を悪あてがひ、うらみをうくれば、にんばちとて、かならず、ひくわんのばちもあたるといふ（十54オ、版本十上36オ3人罰^{ニンバツ}）

他の5例（十一3オ、十二25オ、十六83オ、十七54ウ、十九19ウ）は「にんばつ」。両形行われたものと見える。

35、あたらしき家のだちて（二43ウ、版本35オ10のだちて）

百姓をのだて、郷をにぎやし（四22ウ、版本14ウ10のだて・賑^{ニギハ}し）

「のだつ・のだてる」は「伸長する・伸長させる」意で各地の方言にあり（日本方言大辞典）。「にぎやす」は「賑やかにする・繁盛させる」意の訛形か。

36、則政無分別にて、人のほむるをおもしろがり、ちうせつ人にも一たび敵したる者も、善悪同前に、ばくぐれといふ物に、むたと知行くれたる故なれば（十四78ウ、版本十三45ウ1ばくぐれ）

「ばか」と「呉れる」との合成語であろう。他に未見。

37、わかき者はつ陣などいたし、にぐる敵といへ共、切あふてしんろふ仕りたるくびハ、おるくびと申せども、少ふりよくして、是をりかうものと申ス物成り（十四47ウ、版本十三27ウ5初陣^{ウイチン}）

日本国語大辞典に不載。「はつの陣」（十四23ウ1）とも見える。

38、明日、はますかを信玄通たまハ、出て通さぬやうニせん（十二55オ、版本十一上44ウ10はますか）

1、浜辺。青森県南部。2、海岸に近い田畑。神奈川県高座郡（日本方言大辞典）。いずれかと関連があらう。

39、まして、敵陣の前ひろく、しかも場よしニテいかゞ（九141ウ、版本九下44ウ2場よし）

地形の事、御尋あれば、一段場よしにて候（十二79ウ、版本十一下5ウ2場よし）

平らで動きやすい場所を指す語であろうが、日本国語大辞典には不載。

40、遠州あまがたハ、駿州一騎あいの衆、ばんてがわり也（八43ウ、版本25ウ8番手^{バンテ}がはり）

交替城番のことであるが、交互・代わりばんこの意で各地の方言に行われている（日本方言大辞典）。単に「ばんて」とも言う。

41、遠州・三州のゑづを以、両国けんなんの地、或は大河・小川の出やう、ひと村・ひとさとにわたりいくつあり、ふけ・たまり池、よろづを遠州・三州牢人衆にさたさせ（十三14ウ、版本十二3ウふけ・たまり池）

「沼」「湿地」を指す「ふけ」は、平家物語から文献例のある語であるが、東京都八王子や静岡県田方郡等の方言に生きており、湿地や泥深い田を表す語としても各地に用いられている。池を「たまりいけ」というのは栃木県である（日本方言大辞典）。

42、北条家へ武略にゆく兩人の内、井又左近太夫、酉の三月ぶすがひにてしする（五56オ、版本39オ5毒害^{ドクガイ}）

版本は「毒害^{ドクガイ}」と言い替えている。「付子（とりかぶと）」の根を乾燥させたものが毒薬であるところから、毒を「ぶす」ということは松前方言考に見え、山形・長野・愛媛の方言にも行われている（日本方言大辞典）が、「ぶすがい」と熟するのは珍しい。

43、しさひハ、我等、ちんばで、かた目で、いろくろく、ぶなりにて、しかもぶにんぜんにて、百貫の知行過たるとおぼしめし、被下まじく候（九102ウ、版本九下15オ3無人前^{ブニンゼン}）

人前に出られない程のおおとこを指す語であろうが、日本国語大辞典に不載。「ぶなり」はこの例を出す。

44、いかにもおんみつして、よき儀をば、ふりてい・みきびき、あるいハくちぶりをもつて、諸人にしられ（十38オ、版本十上28オ3ふりてい、みき、びき）

「ふりてい」は様子、格好、素ぶりを、「いきびき」は息づかいを指すかと思われるが、両語共に日本国語大辞典に不載。

45、晴信公ハ、越後の景虎にあひ被成てハへりまくれなり（十9ウ、版本十上9オ9へりまくれ）
肩すかしをくって負けることか。此の語も、日本国語大辞典に不載。

46、弓いる人、てつほううつ人、むまのり、兵法つかひなど、名をつけて、かたのごとくおぼへある人をも、ほうばいゑみがたきとて、人ハ人をへんじよするものにて、わきの事へかゝり、ぶへんしやとは申さぬものなれば、何とぢやうずになりても、でしとる事ハさらにしよせんなき儀なり（二37オ、版本31オ1偏執^{ヘンシユ}）

面々の手になわざりしハ、人を引懸て、晴信公をそしり奉る事、よき大将のおくいハぞんぜず、をのれを以、人にたくらべ、がきへんちよハ武辺不案内のゆへ如此シ（十九ウ、版本十上9ウ1餓鬼偏執）

たゝあそべ、夢の世に、上様はみせへ御ざれば、高天神ハ落ルなど、申て、信長にしたがう様にても、信長をへんしよなるハ、信玄公御たかいの後、勝頼公御代迄も、ながしの合戦にまけたまハぬ間三年は、諸方二而、武田四郎殿をうしろだてに仕り、如此二候へども（十九67ウ、版本43ウ2ナシ）

「へんじよ」は版本のごとき「偏執」の転じたもので、それだけにとりつかれて片意地になつて嫌う意か。日ポ辞書は「へんしゆ（偏執）」を「自分の嫌いな事について悪く言うこと、または、軽んじ侮ること」とする。日本方言大辞典は「へんしよ」に1、しつと。三重県志摩郡「へんしよする」、和歌山県那賀郡「へんしよやいて怒る」日高郡。2、ひがむこと。へんそ。和歌山県日高郡「次郎は負けたのでへんそを起いた」徳島県美馬郡、香川県大川郡。と記すが、これらの語と関連あるかと思われる。時代別は「がきへんしゆ（餓鬼偏執）」を、いつも空腹に苦しんでいる餓鬼のように、他人の立場を考える余裕がなく、自分のことだけにとりつかれていること。と解し、「がきへんちよ」はその転とする。

47、ぎりをもつばらまぼり給ふなれば、我にちうせつの物には、たいかうおば、おゝく、ほそ心ばせをば、少づゝもあておこなひ（五4ウ、版本2ウ7細心操）

惣別、武士の道具は、勝負仕らんとの事なれば、面々がえぬ道具にて、ほそ心ばせもいたしにくからん（七7ウ、版本5オ3武辺）

叔又、人にたゝかわせて仕りよき所へ参るは、右の人よりはるゝ間のある心ばせなるゆへ、是をば、ほそ心ばせと、むかしが今にいたる迄、武士のさほうにて候（十五41オ、版本十四26オ4ほそ心はせ）

かたぐゝの我等が罷出ざる以前の武辺は、某父の六郎兵衛、ほそ心ばせを以テ、つぎあひに仕り候（十八17ウ、版本13オ10ほそ心操）

ちよつとした武功、少しばかりの手柄の意か。第二の例は版本「武辺」とする。日本国語大辞典に不載。

48、あれはまづ、こき候て、こなして、ほして、つきて、又ほして、其後、まづきといふを仕り、さるゑましと申になりて、水お入、よくに候て、ばくはんニ成り申候（十一40ウ、版本十下27オ10まづき・さるゑまし）

麦飯の作り方を述べる箇所であるが、「さるゑまし」は日本国語大辞典に不載。日にさらし、水や湯につけてふくらませることのようであるが、日本方言大辞典にも不載。「まずき」の方は、「一度粗づきした麦を、もう一度つくこと」として徳島県を掲げ、文献例として好色一代男を出す。また、「丸麦。また、ゆで麦」として山梨県を掲げる。『増補甲州方言』⁽¹²⁾には次のごとく記してある。

まずき 大麦を精げるために二度目に搗くこと。その精げたものを「まずき」といった。昔は丸麦を煮たものが「えまし」で、「えまし」を米に混ぜて炊いた。それが「むぎめし」「おはんめし」であった。

『奈良田の方言』⁽¹³⁾には「まづき」に「麦」とあり。

49、此いわれなる故、名大将のたけきほまれお、き君子の下にてハ、人をそしるとけす侍はあるといへども、人をそねみやしむ武士一人もなし（五48オ、版本33オ9いやしむ）

それによつて、上杉家諸侍、百人の内九十九人ハ、人をそねみやしむ男お、し（五52オ、版本36ウ4いやしむ）
けがあるものハ、かさねて是非と存により、やしむにおよばず（五53オ、版本37オ6いやしむる）

これもつて、人をやしむ事なかれ（五53オ、版本37オ8いやしむる）

更に53ウ1・6、56ウ5と巻五に都合7例、すべて版本は「いやしむ」とする。写本にも「いやしむ」は用いられているのであるから（11例、うち巻五に8例）、「やしむ・いやしむ」両形併存である。「やしむ」は「侮る。軽べつする」意で、一茶の『方言雑集及付録』始め各地の方言集に採集せられている（日本方言大辞典）。

50、必、心のこうなる大将ハ、ぬしのいじにあてがうて目き、なさるゝにより、少もそうきやうある侍に、ゆふじやくなるはなし（五3ウ、版本2オ8柔弱）

黒本本節用集に見える「幼弱」^{イウシヤク}か。版本も大全も「柔弱」とする。「柔弱」は日ポ辞書に「弱いこと、または、おとなしいこと」とあり。日本方言大辞典は「ゆるじやくない」という形で、「体が弱い。柔弱だ」の意の、飛騨方言を掲

げる。『増補改訂 甲州方言』には、「北巨摩郡では『おゆうじゃくいわい』といい、嫁が懐妊すると里親から、餅や魚を贈って祝う」とあるが、関連あろうか。

51、さいかわ、ゆきしろ水にて、大きに出でたるに、無理に謙信馬を乗こみ、人数をころし、しかもよき侍・おぼへの

武士、川にて死候て（十九107オ、版本66ウ10雪白水）

雪解け水を「ゆきしろみず」または「ゆきしろ」と言うことは、岩手・宮城・秋田・山形・福島・新潟・岐阜・鳥取等、各地の方言集に採られている（日本方言大辞典）。文献例は義経記や妙法寺記に見える（日本国語大辞典）。

三

以上51項、58語、日本国語大辞典に不載の語を主として、『甲陽軍鑑』写本の用語の中から、方言と関連あるかと思われる語を抽出してみた。「かいがしき、手だけ、にぎやす、やしむ」等、明らかに訛語形と目されるもの数語の外は、語義不分明の語が多く、明確な結論は下し難いが、これらの語の中には、「あてらき事」のごとき、軍鑑成立の当初から甲信地方の方言であった語も、幾分か含まれているかと思われる。しかしながら、大部分は当時の共通語であったものであって、単に日本国語大辞典に未載というに過ぎず、また、軍鑑以外の他の文献に未見というにとどまるもののごとくである。また、日本方言大辞典等によって、現在では各地の方言として用いられている語と知られるものであっても、軍鑑成立の頃は共通語という意識で用いられたものと思われる。

この小報告は、『甲陽軍鑑』の方言をたずねて、室町末期に実際に中世語として生きていた語の幾つかを新たに発掘するということになった。三井家旧蔵の土井忠生博士蔵本という、比較的原本に近いと推せられる写本を底本とする¹⁴ことが出来て、初めて拾い出された語も少なくない。当時の方言と明らかに断定出来る語は余り無いが、現在方言として生きている語は少なからず有ることが分かったことの外に、通行の国語辞典に未登載の甲陽軍鑑用語を提供することによって、室町時代語を何程か拡充することになったかと思う。

注

- (1) 以下、引用は土井忠生博士蔵の写本に拠る。所在は、漢数字は卷、洋数字は丁、オ・ウは表・裏を示す。
- (2) 甲陽軍鑑は信玄の老臣高坂弾正が語り手、大蔵大夫の甥大蔵彦十郎と弾正甥春日惣二郎が書き手であったと考える。拙稿「甲陽軍鑑の成立と伝来をめぐって」(『原本現代訳・甲陽軍鑑』研究編、昭和五十五年十一月・教育社刊) 参照。
- (3) 元和寛永中刊、無刊記十行本(明暦二年刊本の祖本、古典資料類従20・23、昭和五十四年三月・勉誠社刊)。
- (4) 延宝七年序・同八年叙。『甲陽軍伝解』(元禄十二年刊)の依拠本。
- (5) 全二十卷。昭和四十七・五十二年・小学館刊。
- (6) 『甲陽軍鑑』の語彙一斑(『語文』第七十六輯) 参照。「むたと(むさと)」「ばしぐるひ(わるぐるひ)」「ままぎわ(岸ぎわ)」「おほつはもの(大剛者^{カウシモ})」「ひよんなり(異相也)」「ひよんに(異相に)」「けんきやうに(異相に)」「ざんとうなる(左道なる)」などについて述べてある。
- (7) 『時代別国語大辞典室町時代編一・二』一九八五年三月・一九八九年七月、三省堂刊。
- (8) 全三卷。一九八九年七月・小学館刊。
- (9) 昭和四十七年三月・都留文科大学卒業勝村やよい編(稲垣正幸教授指導)。稲垣氏の御好意によりコピーを頂戴した。
- (10) 佐藤堅司博士旧蔵、佐藤憲太郎氏蔵本。『甲陽軍鑑』現存最古本。拙稿「甲陽軍鑑の写本について」(土井先生頌寿記念論文集『国語史への道』昭和五十六年六月・三省堂刊) 参照。
- (11) 一六〇三年(補遺一六〇四年) イエズス会刊。引用は『邦訳日葡辞書』(土井忠生・森田武・長南実編訳、一九八〇年・岩波書店刊) による。
- (12) 深沢泉著、昭和五十四年三月・甲陽書房刊。
- (13) 稲垣正幸・清水茂夫・深沢正志編、昭和三十二年八月・山梨民俗の会刊。
- (14) 注10論文参照。
- (15) 挙例のほかにも、便所の意の「かんじよ(閑所)」「(十一66ウほか7例) などがある。